春日東塔院跡の調査（平城第477次調査）

奈良国立博物館の敷地内に、本来、春日大社に属していた東西の塔の跡があることは、意外と知られていません。1965年に奈良国立博物館により両塔の発掘調査がおこなわれており、遺跡の状況が明らかにされています。今回の調査区は1965年に発掘調査がおこなわれていない、奈良国立博物館本館（なら仏像館）の南東に計219㎡（うち８㎡は北門推定位置）の調査区を設定しました。今回の調査は、奈良文化財研究所と奈良国立博物館による初めての共同発掘調査で、2010年11月15日～12月27日まで調査をおこないました。

春日西塔（殿下御塔）は永久４年（1116）に関白藤原忠実の発願によって建立され、春日東塔（院御塔）は保延６年（1140）に鳥羽上皇の発願によって建立されました。しかし、両塔は治承４年（1180）に平重衡の南都焼き討ちにより焼失してしまいます。その後、東塔は建保５年（1217）に再建され、西塔は宝治年間（1247～1248）に完成したとされています。この再建された両塔も応永18年（1411）に雷火によって失われ、以後、再建されることなく現在に至ります。

今回の調査では、大きく２つの成果があげられます。まず春日東塔を囲む東塔院の北面および東面の区画施設にともなう外側の雨落溝を検出し、春日東塔院の北東隅の位置が確定しました。このうち、南北の雨落溝には多数の丸瓦や平瓦が埋没しており、区画施設の屋根に瓦が葺かれていた可能性が高いと考えられます。Ｌ字形に折れ曲がる外側の雨落溝と瓦の出土状況は、鎌倉時代の『春日宮曼荼羅図』に描かれている東塔院の姿を彷彿とさせます。

もうひとつの成果として、塔建立以前の様子の一端が明らかとなりました。今回の調査で東塔建立よりも古い時期の土坑や礫敷を検出したことで、東塔院およびその北方周辺の一帯が、塔建立以前にすでに開発されていたことが初めて明らかとなりました。

一方で今回の調査では解明できなかった課題もあります。治承や応永に東西塔が焼失した際に、塔のみではなく、塔を囲む区画施設も同時に焼失したのかどうかという点です。この点は今後の課題であり、周辺調査の進展を待ちたいと思います。

なお、12月17日～21日の５日間、奈良国立博物館ボランティアの方々に発掘現場の説明をしていただき、多くの方々に現場を見ていただくことができました。ここに記して心より感謝いたします。

（都城発掘調査部　海野 聡）

Ｌ字形に折れ曲がった春日東塔院の雨落溝（北東から）